

和歌の伝統を探る

— その一つの古今的なもの —

野 崎 親

(一)

和歌は世界では珍らしい日本独特の文学で、しかも日本の文学の中でも最も古い伝統を持った抒情詩である。

三十一文字の和歌、すなわち今日の短歌形式の和歌の起原は正確にはわからないが、一般には、万葉集の時代から古今集のできた平安朝のはじめにかけて固定したのであろうといわれている。このことは、万葉集には、長歌・施頭歌などの他の形式の和歌も可なりまじっているが、大部分はこの短歌形式のものであり、それが古今集になると、ほとんど全部がこの形式のものだといってもいいくらいであるという事実によつても察せられる。このように和歌がこの短歌形式に落着いたこと、しかもこれが爾来一千有余年の今日まで、我が国の国民文学として一般国民の間に普及しているのはなぜかという点、それには次のようなことが考えられる。すなわち、五音・七音を基本とするこの三十一文字の表現形式が日本語の音節によく適合していること、狭い島国で四季の移り交りのはげしい湿潤な気候風土に、しかも単一族として育つて来た日本人の純粋な情緒の表現には、この短小形式が最も恰好なものであったことが、その理由として考えられる。かようにして和歌は日本独特の文学として世界の文学の中では珍らしい存在となつていたのである。しかもこの和歌の持つ抒情美は日本の他の芸術——絵画・音楽・彫刻・建築・茶・生花・舞踊など——の芸術美と相共通す

るものを持つているということが出来る。

田児の浦ゆ打出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける（万葉集）

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ（古今集）
大空は梅の匂ひにかすみつつ曇りもはてぬ春の夜の月（新古今集）
これらの和歌の持つ、清明、哀愁、優艶、の美は、日本の芸術に流れる美の典型をなすものと言つて差し支えない。和歌は日本人の美意識の典型的表現であるということが出来る。

和歌の持つ抒情はその伝統から見て、万葉的なものと、古今的なものとの二つの類型に分けることができる。万葉的とは、万葉集の和歌にあらわれた抒情の一般的傾向であり、古今的とは、古今集の和歌にあらわれた抒情の一般的傾向である。万葉の和歌では、実感をありのままに直接に歌っているが、古今のそれは感情に理知の働きをまじえて間接的により複雑な心を詠もうとする。例えば万葉では散る花の美をそのまま詠もうとしているが、古今のは、散る花の美の上に、散る花のもつ道理をも詠もうとしている。従つて万葉の歌は単純素朴で清明な抒情のものが多く、古今の歌は繊細優艶な抒情のものが多く、調べも万葉のものは壮重な感じが強いが、古今のものは流麗な感じのものが多く。

(二)

人間が自然に対する態度には、古くは神々がそこに宿るものとして信仰の対象として考えられた場合もあり、またそこから生活の糧を得る場所として専ら生活の必要性の対象として考えられた場合もある。自然を美の対象として観照する態度は文化の程度の可なり進んだ後に現われるものと思われる。万葉集にも自然の美を詠んだ歌はあるが、

古今集においては特にその方面の関心が強くあらわれて、部類分けにも春夏秋冬の項目がはっきり設けられて、その歌の数も全体の歌の約三分の一多くを占めるに至っている。これは古今集の和歌の作者たちにそれだけの生活の余裕があったこと、またそれらの人たちが可なり高い教養を持った人たちであったことを示すものであるが、また他面、日本の自然が四季とりどりに美しく、しかも当時の和歌の作者の主流をなす貴族や都人士が住んでいる平安京が、山紫水明の土地であったことにもよるものと思われる。このようにして自然を歌うことはこの後長く我が国の和歌の主な題材となっている。古今集に歌われている自然の景物では、春は、春雪・鶯・若葉・春雨・柳・小鳥・帰雁・梅・桜・霞・藤・山吹、夏は、藤・郭公・橘・蓮・月・常夏の花、秋は、秋風・七夕・月・虫・雁・きりぎりす・松虫・ひぐらし・萩・鹿・露・女郎花・ふじばかま・すゝき・なでしこ・月草・紅葉・菊、冬は、時雨・氷・雪などで、今から見ると極くきまり切ったものばかりになっているのは、当時の主な歌人であった貴族や都人士が、狭い平安京の生活のみで接した風物を主として取扱ったからであるうと思う。しかもこれが後世の和歌の題材にも影響して、所謂日本芸術の花鳥風月趣味の伝統を作ったものとも思われる。次に和歌の伝統を考える立場で、古今集中の四季の歌の実際について見てみたい。

桜花さきにけらしなあしびきの山のかひよりみゆる白雲（巻一、紀貫之）

桜花爛漫の遠望である。「花か雲か」の日本の春の風景である。

みわたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける（巻一、素性法師）
柳の緑に桜の花の咲き乱れた都大路の姿で、絢爛たる京の春の姿である。

故郷と成りにしならのみやこにも色はかはらず花はさきけり（巻

二、平城天皇

旧都の春に對する感慨である。

やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞちりける（巻

二、紀貫之）

花に浮かれた風流人の情痴の世界ともいうべき日本人の誰もが持つ耽美の世界である。

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし（巻一、在原業平）

詞書に「なぎさの院にて、さくらを見てよめる」とあるが、桜そのものを直接には詠まないで、桜の花の散るのを惜しむ心を通じて、日本人の春に對する気持をあらわしている詠みぶりは、古今風の特徴をよくあらわしたものだといえる。

花ちれる水のまにまにとめくれば山には春もなくなりけり（巻二、清原深養父）

深山の晚春の景色で、「山には春もなくなりけり」の言葉に、しみじみとした逝く春の感慨を感じる。

たれこめて春のゆくゑもしらぬまにまちし桜もうつるひにけり（巻二、藤原因香）

病気で引籠っていて、逝く春を惜しむ姿である。

春ごとに花のさかりはありなめどあひむむことはいのちなりけり（巻二、よみ人しらず）

花の色はうつりけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに（巻二、小野小町）

前の歌は、桜のさかりの春に對するある時のしみじみした感慨であり、後の歌は、桜の花の散るのを見て、我が身の上を偲んでのやるせない気持である。

ひとはいざ心もしらずふるさととは花ぞむかしのかににほひける（巻一、紀貫之）

「はつせにまうづるごとに、やどりける人の家に、ひさしくやどらで、ほどへてのちにいたれりければ、かの家のあるじ、かくさだかになむやどりはある、といひいだして侍りければ、そこにたてりける桜の花を折りてよめる」と詞書があつて、即興に詠んだ歌であるが、梅の花に托した懐旧の情のしんみりした感じと、久し振りに会った友人へのなつかしさの気持をあらわしている。

桜花とくちりぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ（巻二、紀貫之）

人間の心の変り易いことの真理を、桜の花の散り易いのと比較して詠んだ歌であるが、兼弘法師も、その徒然草の中で、この歌の言葉をとらえて、「風も吹きあへずうつろふ人の心の花になれにし年月を思へば、あはれと聞えし言の葉ごとに忘れぬものから、わが世の外になりゆくならひこそ、なき人の別れよりもまさりて悲しきものなれ」と言っている。

わがやどの池の藤なみさきにけり山郭公いつかきなかむ（巻三、よみ人しらず）

日本のさわやかな初夏の景色である。

夏の夜はまだよひながらあげぬるを雲のいづこに月やどるらむ（巻三、清原深養父）

明けやすい夏の夜のとまどいである。これも日本の夏の感じをよく表わしている。

さつきままつ花たちばなの香をかけば昔の人の袖の香ぞする（巻三、よみ人しらず）

しみじみした懐古の情、これは日本の伝統の心である。

秋きぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる（巻四、藤原敏行）

秋のけいを風の音によって知ったという、如何にもよく日本の立秋の感じをあらわしている。

昨日こそ早苗とりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹く（巻四、よみ人しらず）

黄金波打つ秋の田圃の風景を前にして、季節の移り変りの早いのに驚いている姿である。

木のまよりもりくる月のかけみれば心づくしの秋はきにけり（巻四、よみ人しらず）

木の間からもり来る月の光に心づくしの秋をとらえているところ、如何にもよく日本の爽涼の秋、靈魂の秋の感じをあらわしている。

白雲にはねうちかはしとぶかりのかずさへみゆる秋の夜の月（巻四、よみ人しらず）

さわやかな秋の明るい月夜の形象化である。

月みればちゞにもこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど（巻四、大江千里）

日本人のひとしく持つ秋の夜の感慨である。

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば（巻六、源宗干）

蕭条たる山里の冬の生活の姿である。

みよし野の山の白雪つもるらし故郷さむくなりまさるなり（巻六、坂上是則）

冬の淋しさ、旧都奈良に対する感慨である。

あさばらけありあけの月とみるまでに吉野の里にふれる白雪（巻六、坂上是則）

旧都の雪景色に対する感慨である。

昨日といひけふとくらしてあすかかは流れてはやき月日なりけり（
卷六、春道列樹）

昨日、今日、明日に飛鳥川をかけて、日本語の特色をよく生かした表現に、万人のひとしく懐く歳末の感慨を歌いあげている。

(三)

男女間の贈答には短小な和歌形式が最も適しているので、和歌は恋の歌にはじまるとも言われているが、事実、万葉集では相聞の歌が全体の約半数を占めている。古今集ではそれ程多くないが、それでも全体の和歌の約三分の一近くを数えることができる。古今集の恋の歌には実感を歌ったと思われるものもあるが、中には色々な恋心を創作して詠んだと思われる歌が可なり多く見受けられる。それらを強いて分類するならば、片思いの恋、見ぬ恋、逢えぬ恋、つれない恋、はかない恋、人待つ恋、忍ぶ恋、心に秘めた恋、熱烈な恋、盲目の恋、命をかけた恋、せつない恋、飽かぬ恋、いつわりの恋、夢に見る恋、別れの恋、後朝の恋、ふるき恋、忘れられた恋、飽かれた恋、恋の涙、恋の思出、恋の反省、恋の後悔、恋のうわさ、などの恋の種々相が詠まれているのをあげることが出来る。そこには人間の持つ恋心のあらゆる姿が、日本人の感ずるしみじみした情趣で歌われているのを見ることのできる。古今集の歌が恋の種々相を詠んでいる点は、同じ平安朝の文学作品である源氏物語が恋愛の種々相を具体的な人間をもって描いているのと似通った点があるように見受けられる。次に和歌の抒情の伝統という立場から、古今集の和歌の中の恋の歌の実例についてあたってみたい。

山桜霞のまよりほのかにもみえし人こそこひしかりけれ（卷十一、

紀貫之）

詞書によると、花つみをしていた女を見て贈った歌となっている。ほのかに見た人への恋心である。「霞のかゝる山桜」の序詞が可憐な女性と、ほのぼのとした恋心を連想させる。

夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて（卷十一、よみ人しらず）

遠く及ばぬ人への慕情とも言うべき純情な恋心である。もの静かな柔い調べが深い余情をたたえている。

唐衣日もゆふぐれになる時はかへすがへすぞ人は恋しき（卷十一、よみ人しらず）

夕暮れの淋しさに心に秘めた恋心がいよいよ嵩じた姿である。巧みな枕詞と懸詞とを用いての表現に、その恋心の美しさを連想させるものがある。

夕さればいとゞひがたきわが袖に秋の露さへおきそはりつゝ（卷十一、よみ人しらず）

いつとでもこひしからずはあらねども秋のゆふべはあやしかりけり（卷十一、よみ人しらず）

ともに恋を持つものゝ秋の夕暮の切ない気持を詠んだものである。

人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花の色にいでなむ（卷十一、よみ人しらず）

目の前の紅いべに花に托したしのお恋の女心のせつなさ、切迫した調べにもよくあらわれている。

夏なればやどにふすぶるかやり火のいつまでわが身したもえをせむ（卷十一、よみ人しらず）

夕されば螢よりけにもゆれども光みねばや人のつれなき（卷十二、よみ人しらず）

ともに、夏のなつかしい風物である蚊やり火と螢火とを比喩として印象的に使つて、胸に燃ゆる忍ぶ恋を歌っている。妖艶な感じである。

思ひつつぬればや人のみえつらむ夢と知りせばさめざらましを（巻十二、小野小町）

うたたねにこひしき人をみてしより夢てふものはたのみそめてき（巻十二、小野小町）

夢に見る恋は、この当時よく歌われているが、この二つとも如何にも小野小町の作にふさわしい。前の歌は、夢に恋人を見て、醒めた後の嘆きである。今見た夢に未練を感じている如何にも王朝らしい情感のあらわれた歌である。後の歌は、はかない夢をもあてにするいじらしい恋心をあらわしている。余情の豊かな歌である。

秋風の身にさむければつれもなき人をぞたのむくるる夜ごとに（巻十二、素性法師）

女の立場で創作した歌である。つれない男を待つ女心のいじらしさがよくあらわれている。

すみの江の岸による浪よるさへやゆめのかよひ路人めよくらむ（巻十二、藤原敏行）

これも題詠の歌であるが、人目がはばかられるので、せめて夢の中でも逢いたいと思うのに、その夢の中でさえも逢えない忍ぶ恋のはかなさを流暢な調べで歌っている。技巧のすぐれた作である。

はかなくて夢にも人をみつる夜は朝の床ぞおきうかりける（巻十二、素性法師）

たまたま思う人を夢に見て、朝になつてもその夢に未練を感じて、床の中でもじもじしている気持を余情豊かに詠んでいる。

風ふけば峰にわかかる白雲のたえてつれなき君が心か（巻十二、壬生忠岑）

とりつくしまもないような片思いの切なさの訴えが、強く張り切つた調べにあらわれている。序詞が印象的で、深い余情を感じせしめる。

おきもせずねもせで夜をあかしては春のものとてながめくらしつ（巻十二、在原業平）

一晚中軒々として恋の懊惱になやんだあくる日は、静かな春雨をじつと眺めながら回想にふけつている王朝時代にふさわしい貴公子の姿が浮かんで来る。流麗な調べとともにまことに艶な情景である。

有明のつれなくみえし別れよりあか月ばかりうきものはなし（巻十三、壬生忠岑）

逢いに行つた女がつれなくて逢えずに帰つた朝の男の嘆きである。余情豊かなものがある。

こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住まへば（巻十三、よみ人しらす）

人間の本能たる愛欲の悲しさを肯定した耽美的気分のあらわれた歌である。

秋の夜も名のみなりけり逢ふといえばことぞともなくあけぬるものを（巻十三、小野小町）

長いと言われている秋の夜もあつけなく感ずる、ようやく逢い得た男女のいつわらざる気持の咏嘆である。

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな（巻十三、在原業平）

詞書によれば、女に逢つた翌朝、相手に贈つた歌である。現実にあつても夢のような気持がするのは飽くことを知らぬ恋心である。

むば玉の鬮のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり（巻十三、よみ人しらす）

源氏物語にも引歌にとられている歌で、当時としては有名であつた歌

らしい。今まで夢の中でのみ会っていた人に現実会ったことの物足らなさを詠んだもので、飽くなき恋の心の複雑な気持をよくあらわしている。

さ夜ふけてあまのとわたる月かげにあかすも君をあひ見つるかな（卷十三、よみ人しらず）

人目を忍ぶ仲でたまたま逢い得た喜びの素朴な味嘆である。月光と恋の喜びとが美しい情景をかもし出している。

あひみずは恋しきこともなからまし音にぞ人をきくべかりける（卷十四、よみ人しらず）

通いそめた男としゃちゅうは逢い得ない心の苦しさを詠んだものである。時代をこえた女心である。

夢にだに見ゆとはみえじあさなあさなわが面影にはづる身なれば（卷十四、伊勢）

男に逢い難い女の歎きのやつれた姿である。巧妙な表現である。

きみやこむ我や行かむのいさよひにまきの板戸もささずねにけり（卷十四、よみ人しらず）

恋人を待つ複雑な気持が田園的風景の中に詠まれている。清純な余情に富んだ歌である。

宮城野のもとあらの小菝露を重み風を待つごと君をこそまで（卷十四、よみ人しらず）

人待つ恋心である。印象的な自然の景物による序詞を使つての表現が、みずみずしい余情をたたえている。

あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲ける大和なでしこ（卷十四、よみ人しらず）

恋心を自然の景物に託して美しい可憐な思慕の気持をよくあらわしている。

今こむといひしばかりになが月のあり明の月を待ちいでつるかな（卷十四、素性法師）

男性の作であるが女心を詠んだ創作である。必ず来ると待たせてついに来なかつた男を待つ女の嘆きの心である。女の複雑な気持がすぐれた技巧でよく詠まれている。

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふにたりまたずしもあらず（卷十四、よみ人しらず）

恋人の来るのを待ちあぐんで詠んだ歌である。来ぬ恋人を待つ切なる気持と、それをおさえようと苦悶する心との複雑な心境を流麗な調べの中に詠みこんだ、すぐれた技巧を見ることが出来る。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわがみひとつはもとの身にして（卷十五、在原業平）

「五条の後の宮の西の対に住みける人に本意にはあらでものいひわたりにけるを、む月の十日あまりになむ他へかくれにける。あり所はききけれど、えものもいはで、またのとの春、梅の花ざかりに、月のおもしろかりける夜、こそをこひて、かの西の対に行きて月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりてよめる」という長い詞書のある歌である。詞書そのものからも如何にも劇的な光景が連想されるが、歌そのものも、変らぬ自然に対して移り変る人生を歌い、回旧の情万感胸にせまるものがある。調べも流麗で、如何にも王朝期の和歌らしい代表作であると言える。

来ぬ人を待つ夕暮の秋風はいかに吹けばかわびしかるらむ（卷十五、よみ人しらず）

秋の夕暮、来ぬ人を待つ心のわびしさが平明に詠まれている。

古今時代の和歌が後世長く和歌の模範として考えられて来たのは、古今集が最初の勅撰和歌集であって、王朝時代の天皇の絶対的權威に對する憧憬がその背景をなしているが、この時代の和歌には各歌人の個性を見るよりも、王朝風ともいうべきこの時代の典型を見ることが出来る。そこにあらわれているものは、王朝貴族の文化人としての「たしなみ」であり、「風流」であり、「教養」である。

また、古今時代の和歌は、その表現の技法において、ある完成の域に達しているといふことができる。序詞・懸詞・縁語等を上手に使うことによつて、日本語の持つ特色をよく生かして、豊かな余情の美でもつて、和歌の短小形式の表現の弱点を補い、また、洗煉された言葉づかいによつて、その短小な凝集された表現の中で、うまく知性と感情の調和をなしとげているなど、すべてが所謂くろうとの歌であり、専門家の歌であるといふことが出来る。

これらの古今時代の和歌の特色は、日本の和歌の伝統をなすものであつて、しかもそれは日本の和歌の本質につながるものではなからうか。(本学教授)